

せいけん
詩集

第二十八篇

作：近藤せいけん

「恋文 一」

小田急線本厚木駅を 毎週土曜日 午後四時頃

ヴァイオリンケースを抱いた 長い髪の少女が降りてくる

駅前の信号を 渡り

五分程歩いた とある ビルに入る

一人の若者が ビルの前ですれちがう

若者の目が 少女の目を見つめる

少女は下を向いて スゥーとビルの中に

ここ数週間 午後四時から このビル前で待ち

すれちがう ただ見つめるだけ

いつしか 暑かった夏も終わり

秋がやって来た いつもの土曜日の 午後四時

今日は いつもと違った

ビル前で すれちがうと 若者が「こんにちは」と

少女に声をかけた 少女は少し 驚いたように

「こんにちは」と答え 若者の目を見た

足が止まった瞬間ヴァイオリンケース が手から 滑り落ちた

若者が急いで拾い上げた 手渡した

「ありがとうございます」 少女は顔を少し赤く染めた

何かが静かに 始まった